

10

# 私学中学生の学習意識調査に基づく教育方法に関する一考察

— 日中異文化交流の検討 —

原 健 一 (藤嶺学園藤沢中学校・高等学校)

## はじめに

本研究は、私学中学生の学習意識の向上を目的に私学教育の実践を報告し、効果的な教育方法を検討することが目的である。教育実践の事例として筆者が奉職している学校の中学3年生の北京研修を検討する。

簡単に述べると中学3年生が実際に中国の北京へ「行く、話す、食べる、帰る」という異文化を経験することによって、その後の学習意識を向上させることにつながるのではないかと、ということである。この変化には、学習自体が知識だけではなく経験によって進められるという点が考察できるが、中国の文化と社会の影響もあるのではないだろうか。

学習意識調査に関し本研究では当校中学1年生から高校1年生までの一部の生徒を対象に行ったアンケート調査と北京の学校の調査が実施できなかったため、当校高校と交流がある上海外国語大学附属外国語学校の中学・高校生から得られたデータを考察する。なお、調査票は財団法人日本青少年研究所「高校生の学習についての調査」を参考に作成した。

最後に、学習意識の向上をより広く考察し私学教育のこれからを考察する。

## 1. 私学中学生と現代社会

### (1) 社会構造の変化による便利な社会

近年、日本の中学生は学力低下・学習意識の低下と言われている。本当に学力が低下しているのか、学習意識が低いのかという問題は検討の余地があるが、中高生は成熟社会における生育環境において学習意欲・進路への意欲が個人的な理由として低いのではなく、社会的な理由で低下していると言えるのではないかと。またフリーター、ニート、資格社会という言葉にはサービス経済化した3次産業への社会構造の変化が考えられると同時に、中高生に対する社会からの将来への見通しが定まらない社会的な理由による現象が起こっているのではないだろうか。

前述したサービスによる便利な社会とその便利な社会の要因である産業構造の変化によって中高生の進路への志望は、より楽な仕事、より自分の時間を持って、大変ではない仕事、競争したくないという考えに向いているのではないだろうか。便利だからこそその現象のように考えられる。このような問題意識から私学教育実践を考察する。

### (2) グローバルな時代

現代社会の便利さについて述べたが、グローバルな時代とも言える。飛行機による時間距離の短縮は、世界を小さくつないでいる。短い時間の割には、飛行機を降りた先の国の文化や社会は、来訪者にとって異文化で多様な影響を与える場所である。

社会的な理由で学習意識・進路志望にヴィジョンを持っていない状況である日本の中学生の目に経済成長が著しい中国の社会はどのように映るのだろうか。そこでの出会いは、人格の形成、その個人の生涯において得難い貴重な経験になっているのではないだろうか。

## 2. 藤嶺学園藤沢中学校高等学校

### (1) 建学の精神

当校は、鎌倉時代、念仏と遊行に徹し、捨聖と呼ばれた時宗の開祖一遍上人の教えを根本として、大正四(1915)年に創立された男子校であり、現在生徒数は中学425名、高校630名である。建学の精神である「質実剛健」「勇猛精進」<sup>1)</sup>は、人間完成を目指した精神である。一遍上人は「臨終即ち平生なり」という思想を持たれ、人間として生き抜くための平生の心構えを教示された、その思想に結びついた建学の精神である。

2001年中学校を開校する際に、この建学の精神をもとにアジア・オセアニア地域の重要性が高まっていく時代に、柔軟な発想と旺盛なチャレンジ精神を持ち、国際社会に太刀打ちできる21世紀のリーダーの育成を目指す、逞しい男子の育成を目指す教育方針が作られ実践されている。中学3年生の北京研修はこの教育方針の具現化の一つである。

## (2) 夢、実現に向けて

入学式には、新入生は「夢」を持参する。「夢」は入学前の将来の夢をこれからの学校生活に向けて書いてくるもので、入学式ではクラス代表者が自分のものを発表する。「夢、実現に向けて」という言葉は、始業式や終業式に校長先生から生徒へ伝えられ、授業も厳しく工夫に富んだ教科指導が生徒の将来のために行われている。

その他にも独自の授業や行事があり、国際人に向けての教育が行われている。高校と合わせ茶道6年間、剣道5年間の授業があり、生徒は日本文化の「礼儀」「お持て成し」を身体から学習する。また体育ではネイティブの先生も加わり単なる英語力ではなくオーラル面の環境が作られている。行事ではクラス・学年集団で行う文化祭(藤嶺祭)や体育祭に加え、中学1、2年合同のサマーキャンプがある。また調べ学習から発表まで主体的に学ぶ中学1、2年の研究発表、3年の卒業研究レポートなど、将来に向けての学習方法を学んでいる。そうした中学校生活の最後にあるのが、中学3年生の3月に希望者による参加で行われる北京研修である。

## (3) 北京研修への思い

北京研修について校長は「日本の子どもたちが今後も豊かさを享受できるとは限らない。伸びざかりの国に行き、学ぶことで豊かになれるという成長のパワーにふれさせたい<sup>2)</sup>」という思いがある。

参加した卒業生には、北京の中学生が猛勉強している姿から影響を受け、東京大学に現役合格した者もいる。その生徒は北京研修から始まる中学高校の海外研修を振り返り「世界は広く未知に溢れ、こんなに面白いものなのか」という感想を持ち、現在、大学でも英語のみで行われる授業を選択し努力を続けている。また他の卒業生には、中国に留学する者や東京外国語大学に進学した者もいる。

## 3. 北京研修

### (1) 北京第八中学怡海分校

北京第八中学怡海分校(以下、怡海分校)は、1998年に設立された私立学校で、北京怡海集団(不動産投資会社)が投資をして北京郊外に大型団地(怡海花園団地)を造り、その住民の子弟のために設立された学校である。幼稚園から高校まで全校生徒1000人以上で、生徒の半分以上は平日、宿舎を利用し、週末は自宅で過ごす。この学校の中学2、3年生との交流が北京研修である。当校からは、約30名の生徒がこの研修に参加している。

2泊3日のホームステイ前に、学校でのスポーツによる交流や日中の文化交流が行われる。ホームステイ以外に万里の長城を見学したり北京市内の街を散策、本場中華料理を食べたり異文化を体験する研修である。

### (2) 歓迎される中学3年生

北京研修は、中学3年生という発達段階で中国文化を経験する。中高一貫の生徒にとって中学3年生は、中学1、2年生とは違う高校に向けての学習があり、また中学入試から中学2年生まで継続してきた勉学も自己への関心が高まり、心身のバランスの揺れなど落ち着かない面も見られてくる。学習面だけではなく人間関係においても自己を安定させる自信が必要になってくる時期である。そのような時期にある中学3年生にとって2泊3日、一人でホストファミリーと過ごすことは、自分を知る機会になり、異文化との出会いとして貴重な経験と言える。参加者の感想からは、ホストファミリーとの出会いと別れがとても貴重な経験になったと書かれている。

それは、ホームステイ前の歓迎会でも、ホストファミリーとの出会いでも生徒は大歓迎される。中国は一人っ子政策であり、当校の中学生はホストファミリーの我が子のように迎えられる。こうした中国文化である家族を思い合う心理が、当校の中学生の自己肯定感を高めるきっかけになることも考えられ、中国人とのコミュニケーションを通じて、学習意識にも影響があると考えられる。

## 4. 日中学習意識調査

北京八中怡海分校では、調査項目と調査対象の生徒の人数の関係で調査が実施できなかった。今回は中国の中学生の学習意識調査として、当校高校が交流している上海外国語大学付属外国語学校の中学生高校生を対象に調査が行えたため、参考までに中国の中学生と、当校の生徒の学習意識調査を考察する。

### (1) 先行研究

本研究の調査用紙を作成する際に参考にした財団法人日本青少年研究所「高校生の学習についての調査」について『大學新聞』<sup>3)</sup>にその考察があるので、まずは日中の高校生の学習意識について引用しまとめる。なおこの記事は米・韓も含む考察であるが本研究の目的から米・韓を除き引用する。

#### ① 学業・成績「日中ともに成績に不満感」

自分の成績に「とても満足している生徒」は、日本では3.6%、中国0.5%である。「あまり満足していない」「不満」を合わせると、日本71.8%、中国は83.8%である。また中国は成績上位者も3割が満足していて、7割が満足していない。

#### ② 勉学・態度「消極的な日本」

授業中に「きちんとノートをとる」は、日本93%、中国90.1%である。一方「授業中、積極的に発言する」「授業で習ったことを自分でもっと詳しく調べる」は、日本15.5%、中国48.4%である。中国の積極的な態度が表れている。

### ③勉強時間「短い日本、長い中国」

日本は宿題時間が「30分～1時間以内」が3割弱、「1～2時間以内」「30分以内」がそれぞれ2割前後である。一方、中国は「30分～1時間以内」が約15%、「1～2時間以内」が約25%、「2～3時間以内」が約20%である。また宿題以外の勉強時間については、日本の「しない」約35%、「1～2時間以内」は15%に満たないが、一方中国は、「しない」約5%、「1～2時間以内」は約25%である。

### (2) 日中中学生の学習意識調査

先行研究から日本の高校生は消極的な学習意識で、中国の高校生は積極的であることが考察できるが、当校中学生と上海外語付属中学生(以下、上海外大中学生)の学習意識調査では、同様な傾向は見られるものの、それに加え私学中学生の学習への意識を考察することができる。高校生と中学生の相違があるために、全体と比べることは難しいが、上海外大中学生との相違によって日中中学生の考察を行う。

#### 【調査対象】

- ・上海外大中学校 合計46名(中学1年生20名 2年生10名 3年生16名)なお、同校高校1年生27名も参考のため実施
- ・藤嶺学園藤沢中学校 合計93名(中学1年生30名 2年生33名 3年生30名)同校高校1年生30名実施

#### ①学業・成績について

先行研究①とほぼ同様な調査結果であった。「成績に満足しているか」について「とても満足している」「まあまあ満足している」と答えた生徒は当校16%に対し、上海外大中学45.6%である。「あまり満足していない」「まったく満足していない」と答えた生徒は、当校81%で上海外大中学は47.9%であった。

#### 「よい成績を取るために頑張りたいか」について

「よい成績を取るために頑張りたい」	当校 61.1%	上海外大中学 63%
「よい成績を取りたいが、そんなに頑張ろうとは思わない」	当校 27.4%	上海外大中学 28.3%
「よい成績を取りたいとは思わない」	当校 6.3%	上海外大中学 6.5%

上海外大中学生は「よい成績を取るために頑張りたい」と思っているかという成績に満足せずに頑張ろうと思っているがその数値は当校生徒の数値と同じ傾向を示している。それは「よい成績を取りたい」という意識は同様であるが、実際に「頑張る」こと、学習の実行力が上海外大中学の方が高いことが、この他の調査項目から考察できる。

#### ②「宿題以外に予習、復習するか」

「いつもそうだ」「時々そうだ」合わせると	当校 27.4%	上海外大中学 74.8%
「授業で習ったことを自分でもっと詳しく調べるか」		
「いつもそうだ」「時々そうだ」合わせると	当校 10.6%	上海外大中学 84.8%

上海外大中学と比べると当校生徒の数字は低いように考えられるが、実際4人に1人は宿題以外に予習、復習すると答えており、授業で習ったことを自分でもっと詳しく調べることも1割の生徒は行っていると考察できる。

①②の数字から、学習意識はあるが学習方法や学習の習慣化などに課題が見られ、具体的な教育方法の工夫によって学習を実行することができるのではないかと考えられる。もちろん日中の学習に関する文化の相違もある。

#### ③「本を読むのが好きですか」

「とても好き」「まあまあ好き」を合わせると 当校 84.2% 上海外大中学 91.3%

本を読むという学習方法は、当校では国語の授業で開始10分間読書など、読書の習慣化が行われている。学習意識に対して学習する方法と習慣化が数値に表れている。

#### ④よく発言させる授業

「いつもそうだ」「半分以上そうだ」を合わせると上海外大中学91%で当校60%である。上海外大中学は、語学の学校でもあり、発言させる授業は多く感じられるが、当校も60%の生徒が発言させる授業を受けていると意識している。一見、積極的な中国、消極的な日本という前述した傾向と考えられるが、当校の中学生も発言する授業を意識していることが考察できる。

## 5. 教育方法の考察

本文のはじめに結論として、中国の北京へ行き、異文化を経験することによって中学生の学習意識は向上するのではないかと考えたが、アンケート調査を実施して、そもそも当校中学生の学習意識を向上させるという視点は少し中学生の実態と違う。意識はあるものの学習を実行する力が上海の中学生と比べ低いことが調査から考察できる点である。具体的に説明すると、学習に関する「成績を上げるためにがんばりたい」という意識をどのように学習することへ結び付けているか、この点で学習実行力が中国の中学生は高いように考察できる。それは経済的な発展という中国社会の要素ももちろんあるが、中学生に対する周りからの期待や、文化的な違いである中学生生徒と教師との関係が日本と中国の違いと言える。学校の授業内だけで疑問を無くそうとする中国の中学生に対し、学習塾の影響からか、授業を理解するための学習という日本では当然と考えられる宿題を含めた家庭学習というものが浮き彫りになる。中国の中学生は授業や宿題以外に、自分で学習を進める、広

げる様子が考察でき、それが日本とは違った家庭学習の様子なのかもしれない。当校、卒業生が「中国の中学生の猛勉強する姿に影響を受けた」という感想は「宿題をこなす」という日本の勉強の仕方とは違う自ら学ぶ姿勢を中国の中学生は持っているのではないだろうか。

日本の中学生が勉強をしていないと述べているのではなく、学習の目的が両国では違うのではないかとこの学習方法の違いによって考えられる。それは「将来役立つ勉強をしたい」と考える中国中学生が多いことと関係してくるよう考察できる。

教育方法の考察としては、中国の中学生が感じている勉強を進めていく意識と実行力を北京研修のようなホームステイでは実際の学ぶ姿として日本の中学生には写り、それは「やらなければならない宿題」、宿題をこなすという様子とは違って生き生きとしたエネルギーを感じさせる姿なのである。日本の中学生の学習意識をより一層実行力あるものにする教育方法が必要なことのように考察できる。それは宿題とは別の自分で課題を見つけ解決していく学習なのではないだろうか。

本研究は以上であるが、怡海分校へのアンケート調査を来年度に向け準備している。本研究で行えなかった怡海分校生徒との分析と、日本の中学生と中国の中学生をそれぞれの文化と社会を研究する中で分析することを今後の課題としたい。それは中国も決して学習意識が高く自ら学び問題を解決していく生徒だけではなく、色々な現象が起こっているように考えられるからだ。なお、今年3月の北京研修参加生徒は50名の予定であり、その全員に、北京研修の個人的な目的、目的が定まっていない生徒には考えて書くよう北京研修の事前指導を行っている。この指導と事後指導の感想からも今後の日中中学生の研究を進めていこうと考えている。

## 6. 私学教育に関する考察

勉強の実行力について、前述したがそもそも日中の学習の目的が違うことは言える。北京研修によって受験勉強ができるようになるのではなく、学ぼうとする動機に関して、自分の頭の中で、自分の判断で行えるようになるのではないだろうか。

北京研修に参加した生徒に話を聞いたところ、周囲の「偽物の多い中国、反日感情の中国人」というテレビから流されたイメージや言葉による情報に対して、「それはそれで。自分が体験した中国は違う面がある、料理は美味しい、勉強を頑張る中国人…」と話した。これは「見識を広げる」「百聞は一見にしかず」であり、経験としての北京研修が考察できる。それは、自分への周囲からの情報（言葉により操作される生徒）と、自分が食べた中華料理という経験からの判断という思考様式の違いのように考えられる。

これが本文の一つの結論として考えられることであり、社会的な要因からの学習意識の低下であれば、個人の学習への感度を上げることを学校行事で具体的に考えられるのが私学教育の姿なのかもしれない。それは北京研修を検討する中で「なぜ欧米ではなく、中国なのか」という疑問に対する答えにもなる、それは「好奇心」であり、北京オリンピック後、様々な中国の情報が流れているが実際に中国を訪れた中学生はまだ少なく、逆に良いイメージだけではない中国に対して、その珍しさ、知ってみたいという生徒の好奇心が親の心配を超えて、見られているのが北京研修なのかもしれない。それは自分の生活文化とは違う地域の生活文化を理解する姿勢としての国際感覚の経験とも言える。

## 謝 辞

本研究を進めるにあたり、私学教育に関する研究に精通され中国の留学生へのご指導もなさっている関東学院大学名誉教授 折橋徹彦先生に度重なるご指導とご助言を頂けたことに、記して心より厚く御礼申し上げます。

## 脚注

- 1) 「質実剛健」の「質実」とは素朴で外見の虚飾にまどわされず、真面目にももの本質と真実を探求することを指し、「剛健」とは、何事にも動じない強い意志と健康な肉体である。即ち、自己が一人の人間として貴い存在であることに目ざめ、真に社会に貢献できるよう、その人格の完成につとめることを教えている。「勇猛精進」とは、仏教語の引用であるが、勇みすすんで屈しない心をもって、苦難に打ち克ち、仏道を修行することから転じて何事にも動じない勇気、即ち猛烈にやる気を起こし、あらゆる困難にも負けず、大きな目標を達成するために、一生懸命努力を怠らないこと。
- 2) 『朝日新聞ウィークリー AERA 9月20日号』朝日新聞社 2010年
- 3) 『大學新聞 6月1日』大学新聞社 2010年

## 参考文献

- 日本青少年研究所『高校生の勉強に関する調査—日本・アメリカ・中国・韓国の比較』2010年  
 竹内 実『中国という世界——人・風土・近代』岩波書店 2009年  
 藻谷浩介『デフレの正体』角川書店 2010年  
 土井隆義『キャラ化する／される子どもたち～排除型社会における新たな人間像』岩波書店 2009年  
 貴戸理恵『「コミュニケーション能力がない」と悩むまえに～生きづらさを考える』岩波書店 2011年